

第 5 回（11/5） 教育 2 ——学びからの逃走

（内田樹、2007、『下流志向 ——学ばない子どもたち 働かない若者たち』講談社）

1. BBS 投稿から

「自分は面倒くさがりで 人に言われないとやれない人間なので道を示してくれる巣鴨がいいと思いました。強制力だけではなく親身になって生徒のことを考える所の方がいいと思いました。」

「興味・関心が見つからない人は強制に近い形で背中を押してもらった方がいいのではないかと思った。なぜなら、そうやって背中を押してもらうことで何かに興味を持つきっかけができるからだ。」

「麻布は自由な校風というより、「自由がすぎる」校風であり、社会に出た時に周りに馴染めなくなる人が出てしまう。将来、社長や芸術家になる人なら良いかもしれないが、一般企業に勤めたりする人は巣鴨の方が良いと思った。」

「…一見、「自由」と聞くとのびのびとして楽しめそうなイメージである麻布。けれど自由なだけあって社会に出たときに今までのやり方や環境が、がらっと変わって周囲に対応する力が不十分のため将来を心配に思う親も少なくない。一方、巣鴨はゆとりとは真逆で厳しい校則が原則として定められている。だが、どんな努力も惜しまず努力することの大切さを第一に考えている教育方針であるため、社会に出たときにこの力を役立てるのに期待できそう。どちらの学校の教育方針も一理あるため、どちらのほうがいいかは決めがたいと思った。」

「私は 努力を強制されることにもメリットがあると考える。勉強を例とすると、何かについて考える・何かを知りたい時、それを行うための予備知識が必要になる。その予備知識の部分を強制的に学ばせておくことは重要だ。さらに、知識がないと自分が何をしたいのかにも気付かず自由の幅が広がらない。自由のみが良いという考えは適切ではないのではないか。」

「自分は 自由を与えられた時に全て自分の力でやらなければならない気になり、厳しい校則などに縛られた環境下にいるときよりも自分でも驚くほどの成長を感じたことが実際にあるため、自分自身は麻生のほうが合っていると感じた…。」

「私は麻布の自由な方がいいと思った。自由にした方がのびのび生活出来て色々ルールが決まってるよりも自分で考えて行動するから頭が柔らかくなると思ったし、社会にでた時に柔軟な対応をした方がいいとおもった。」

「…私は、ルールが厳しすぎると強制されてる気がしてやる気を失ってしまうし、自由すぎると全くなにもなくなってしまったので、ある程度強制されてるくらいが丁度いいと思った…。」

「自分の目標が決まっているのなら自由な校風でもやっていけると思うし、逆に決まっていないのなら自由な環境にいることによって怠けてしまうこともあり得ると思う。」

「…どんな環境でも、強い目標や、具体的な将来のビジョンを持っている人は、将来に向かって、頑張れるのではないかと感じた。」

「自由な環境の中でも 強い意志や、やりたい事がある人は自由な校則でもいいと思うけど、流されてしまう性格の人は校則の厳しい環境で過ごした方が成長できるのかなと感じた。でもやっぱり環境とかじゃなくて自分次第なのかなと思う部分もありました。」

「強制が行動のきっかけになることはよいが、そこから自発的に行動することが重要だと感じた。自発的に行動できないと、ずっと人に強制され続けなければならないのではないだろうか。」

「麻布の良いところは想像力を育てられるところである。なぜなら 想像力は自由から生まれる と私は思っているからだ。巣鴨の良いところは 勉強の導きがある というところがある。しっかり面倒を見てくれる、2つの学校は勉強の捉え方に違いがある。麻布は勉強を勉強と捉えていない。生活の一部だというのだろうか。そういった感じがする。逆に巣鴨は勉強を戦いのように捉えているように見える。まるで兵士を育てるようなイメージである。」

「生徒からしてみれば強制されるより自由な方がいいという人が多いと思う。だが、子にちゃんとした職に就いてほしい親の立場から考えると、自由な校風で将来的に成功する人がいる一方でその後不安定な人生を送る人も多い学校よりも、厳しい校風で自発性や柔軟な思考力が育ちにくくとも安定した進路に進む人が多い学校を選びたくなると思う。実際、私の通っていた厳しい校風の高校も、口コミサイトで生徒からは星 1～2 ばかりでとても不評だったのに対し、親からは星 4～5 ばかりでとても好評だった。」

「巣鴨は、厳しい環境下の中で勉強をし、その中で社会のルールを学んでいくことができる。だけど、決められたことをやっているだけでは、自分の想像力や意見を見出しにくくなる。一方麻生は、自由に自分が学びたいと思うことを勉強し、発想力が豊かになる。だけど、学校生活伸び伸びと生活してた分 社会に出た時型にはまって仕事ができるのかとおもった…」

ほか多数

過去の投稿から

「…学力も社会マナーもどちらも学ばなくてはならないものです。それらはどちらの学校でも学ぶことが可能でしょう。ただ リスクを考えれば、巣鴨学園のほうが先生のバックアップもあり、やらなくてはならない状況になるため全体の成長は大きい でしょう。」

「最後に自己管理という話が出ましたが、巣鴨でも麻布でも自己管理の力はそのうち育つと思います。その前に、中学や高校でしかない、集団行動 が出来なければ社会で上手に生きていくことは難しくなってくると思います。麻布のように中学から一人の自由な世界というのは、確かに独創的な、高い能力の人材を育てるかもしれませんが、そういった人材は社会で生き抜けるかといったらそうでもないと思います。生き抜けるのはごくわずかの人間 だと思います。なぜなら、一般社会は当たり前のことを当たり前に出なければいけなくて、ある一定の型にはまりざるを得ない からです。だから基礎的な力を鍛えてくれる巣鴨が良いと考えました。また、何かやりたいことを見つけるにはきっかけが必要であって、そのきっかけを作ってくれるのは、先生だ と思います。巣鴨ならきっかけを作ってくれる先生がいると思います。手を差し伸べてくれます。その点でも巣鴨の教育方針が良いと考えます。麻布の教育方針は大学に入学すれば誰でも味わえる…」

「私は初め、麻布の教育方針に賛成でした。理由は、自由だからこそ自分のやりたいことを見つけることができ、それに必要な勉強は何かを考え、取り組むことができるのではないかと考えたからです。やれと言われてからやるのではなく自分の将来に必要なだからという理由で勉強をしたほうが身に付く のではないかと思いました。しかし、みんなの発表を聞き、自分は巣鴨方式の高校であったからこそ、今そう思うのだと気づきました。結局 大学は自由なので高校はきつく縛られるくらいがちょうどいい のかもしれません。現在、高校よりも課題の量が大幅に減り、自分のやりたい勉強ができる時間がたくさんとれます。これは高校の課題の方が多かったからこそ余裕のもてる時間なのだと実感しています。」

「校則の厳しい学校をとるか自由な学校をとるか。そもそも校則というものは、まだ世の中の良し悪しがわからない私たちを守るためにあるのではないかと思います。しかし、生徒からしてみれば校則なんて嫌なものでしかありません。面倒臭い、嫌だと思ってただ過ごしているだけでは意味がなく、校則の必要性を理解する ことで初め

て、校則があることの価値がわかるのではないかなと思いました。一方で 自由とは、聞こえはいいですが裏返すと自己責任 です。自分のミスも自分で処理しないといけません。取り返しのつかないことになっても自分のせいです。だからこそ学ぶことが多い と思います。だから私がもし母親だったら、自分の子供は麻布に通わせたいです。」

2. 学習意欲の低下

「日本の子どもたちは小学校高学年から中学校・高校にかけて、大多数が学校の勉強を嫌悪し、勉強から逃走しています。かつて日本の子どもたちは、世界のどの国よりも勉強に意欲的に取り組んでいましたが、今や、世界でもっとも勉強を嫌悪し、勉強しない子どもへと転落しています」（佐藤 2001）

中学 2 年生の校外学習時間

1995： 世界平均 3.0 時間、日本 2.3 時間（37 か国中 30 位）

1999： 日本 1.7 時間（37 か国中 35 位）

高校生の 60%が校外学習時間ゼロ

全国の大学生 4,600 人英語力調査

中学 3 年生程度（英検 3 級） 45 %、中学 2 年生程度（英検 4 級） 13 %

学力が低下していることを本人はそれほど痛切には自覚できない

- 学力が集団的に落ちている
- 受験は同年齢集団のなかでの相対的位置が問題になるのみ

大学生の学力低下

- レポート：自分の主観的な「好き／嫌い」「わかる／わからない」がほとんど唯一の判断基準
- 教員の「言っていることが、わからない」「言っていることが、好きじゃない」
- 国立大学でも状況同じ

3. わからないことがあっても気にならない

- 自分がわからない言葉が、あきらかに彼らを想定しているメディアの中に頻出してきても、それが気にならなくなっている cf. ファッション雑誌の用語意味調査
- メディアを通して見える世界（世事、社会、政治、経済…）は「虫喰い」的に、一面に「意味の穴」が開いている状態？
- 自分たちには学力がないとか、英単語を知らないとか、論理的思考ができないといったことを、多少は自覚していても、そのことを特に不快には思っていない
- 無知のままでいることに生きる不安を感じずにいられる

↑

「自分の知らないこと」は「存在しない」ことにしている？

4. 「何の役に立つの？」という問い

「これを勉強すれば何の役に立つのですか？」 「学ぶことは何の役に立つの？」

「等価交換」のロジック（消費主体としての自己認識）

- 教室に長時間じっと座り、黙って先生の話聞いてノートを取るという「苦役」
- 「苦痛」や「忍耐」というかたちをした「貨幣」を教師に対して支払い

↓

どのような財貨やサービスが「等価交換」されるのか、という問い

功利的な問い、経済合理性による動機付け

その「答え」が気に入れば「やる」し、気に入らなければ「やらない」という採否の基準

5. 「等価交換」的な動機付け：その背景

① 家庭内労働の消失

- 労働主体・生活主体として自分を立ち上げる（社会的活動への参加）という経験の欠落
（労働・「贈与」体験 → 感謝、社会的承認 → 自己アイデンティティ確立）
- 社会関係に入っていくときに、労働からではなく消費から入った
- 子どもたちは就学以前に消費主体としてすでに自己を確立している

「ボクは買い手である」と名乗りさえすれば、どんな幼児でもマーケットに一人前のプレイヤーとして参入することが許される。そのことの快感

「自分にその用途や有用性が理解できない商品」（＝学び）には、当然「買う価値がない」と判断してしまう

② 「不快」という貨幣

等価交換に差し出す貨幣 → 授業を黙って耐えて聴くという「苦役」「不快」

起源は家庭にあり？

- 「他人のもたらす不快に耐えること」が家庭内通貨として機能する！
- 父親／母親の働く姿が不可視、夜ごと帰宅時に全身で表現する「疲労感」
- 母親／父親の、家事や家族の世話をすることへの「不快」「不機嫌」

↓

不快を記号的に表示することで交換を有利に導こうとするタクティクス

6. 教育・学びの逆説、本質

子どもの目から見て、学校が提供する「教育サービス」のうち、その意味や有用性が理解できる「商品」がほとんどない？

↓

学びのプロセスは空間的に表象することができない ← 「時間」

「教育の逆説は、教育から受益する人間は、自分がどのような利益を得ているのかを、教育がある程度進行するまで、場合によっては教育過程が終了するまで、言うことができないということにあります。」（内田 2007: 46）

「…起源的な意味での学びというのは、自分が何を学んでいるのかを知らず、それが何の価値や意味や有用性をもつものであるとも言えないというところから始まるものなのです。というよりむしろ、自分が何を学んでいるのか知らず、その価値や意味や有用性を言えないという当の事実こそ学びを動機づけているのです」（内田 2007: 63）

学びとは、学ぶ前には（本人にとって）知られていなかった度量衡によって、学びの意味や意義が事後的に考量されるような、ダイナミックなプロセス

⇕

消費：本質的に無時間的な行為（その場だけで完結する瞬間的な行為）。変化しない主体

- それらのものが何の役に立つのかをまだ知らず、自分の手持ちの度量衡では、それらがどんな価値を持つのか計量できないという事実こそ、彼らが学ばなければならない当の理由
cf. 愛用の 30 cm 「ものさし」 で、世の中のすべてを測ろうとする傾向
- 「外界の変化に即応して自らを変えられる能力」に目を背け、「学び」「成長」へと押し流そうとする圧力に抗う若者たち
- おのれの幼児的欲望を抱え込んで、決して成長変化することのない消費主体のままでいること

7. 参考：自己決定フェティシズム

「自己決定フェティシズム」

「自分のことは自分が決める」という自己決定権に対する固執

「私は私の運命の支配者である」という自尊感情

「自己決定することはいついかなる場合でもよいことである」という信憑

「自己決定したことであれば、それが結果的に自分に不利益をもたらす決定であっても構わない」

8. 参考：「オレ様化」と「近代社会」（諏訪 2005）

近代的な個人：「おとな」になるということ（＝「社会化」）

2つの自己の区別理解

「私そのもの」（本能的自己。「私が私である感情的根拠」？）

＋

「私」（社会的個人。ほかのみんなと共有性をもつ「市民」「個人」）

「…近代では人は「私そのもの」では生きられず、「私」（社会的個人）という社会的なあり方を生きるしかない…。…おとなになるということはまず「私そのもの」が社会的に生きる「個」の意識ではないことを認識し、ほかの誰からも認知される「私」のレベルで生きねばならないことを認めることではなかろうか。そのとき、子どもの内部（内面）で多くのものが断念され、彼（彼女）の持つ「私そのもの」が実は「主観値」であることに気づくのである。」（諏訪 2005: 64-65）

近代社会における個人の学習課題、学校のエデュケーション課題

- 日常生活のなかで身につけてきた感覚や知識が相対化されたり、否定されたりする経験
- 自己を超えた客観的な視点に立つこと
- 自分では「真実」を確信することができず、自分自身では確かめられない真実や普遍があることを認知すること
- 自分の目には見えないもの（こと）や、自分にわからないもの（こと）にも価値があることを知ること

〔が必要であるにも拘わらず、少ない〕

↓

対等意識（教師－生徒）のもとでは教育関係は成立しない

まず「共同体的」関係のもとでの学び、その後に「市民社会的」関係による学び

9. 考察

ディスカッションについての確認：

- 一定の見解へと誘導しているわけではない
- 「正解」というものはない
- 「議論の正しい方向性」というものはない

10. 引用・参考文献

内田樹、2007、『下流志向 ――学ばない子どもたち 働かない若者たち』講談社

諏訪哲二、2005、『オレ様化する子どもたち』中公新書ラクレ

喜入克、2007、『高校の現実』草思社

佐藤学、2000、『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店（岩波ブックレット）

佐藤学、2001、『学力を問い直す』岩波書店（岩波ブックレット）

荻谷剛彦、2001、『階層化日本と教育危機 ――不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社

山田昌弘、2004、『希望格差社会 ――「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房

11. 次回までの課題

授業 HP の掲示板（BBS）への書き込み

- 初回～今回までの授業運営に関するクレーム・リクエスト・感想
- 期限：1 週間（11/11 23:59 まで）

12. 次回の予告

11 月 12 日 「仲間以外はみな風景」

以 上

【授業 HP】 <http://t-enomoto.la.coocan.jp/komajo/>

【BBS】 <http://9021.teacup.com/tenomoto4/bbs>